# 一筆入魂83歳

真剣な顔つきで練習する升崎正憲さん＝松山市小栗4丁目

あすは敬老の日。65歳で実用書道を始め、現在も市役所で賞状書きをする松山市の升崎正憲さん(83)。実用書道とは別の、より芸術的な書道に挑戦する「スーパーおじいちゃん」が、このほど第25回高円宮杯日本武道館書写書道大覧会毛筆の部で奨励賞を受賞した。升崎さんは「まだまだ一人前になれない。日々勉強」と毎日筆を執る。

## 松山・升崎さん 高円宮杯で受賞

# 実用から芸術へ 書道が青春

升崎さんは65歳の時、松山市若草町のシルバー人材センターを訪れ「年を取っても役に立ちそうだ」とあて名書き教室で実用書道を習い始めた。書道は「小学校以来だった」というが、練習を重ねて腕前を評価されるようになり、10年ほど前から松山市役所であて名書きや式次第、賞状書きの仕事を頼まれるようになった。平日は午前9時～午後5時、賞状の名前などを書く。同センターは「升崎さんは、とても謙虚な方で、めきめきと上達。升崎さんを指名してくる企業もあるほどです」と仕事ぶりを絶賛する。

80歳を過ぎて、自分の好きなように書くことができる芸術的な書道にも興味がわいた。新聞の折り込み広告で、近所に書道塾ができたことを知ったが、市役所の仕事が忙しくて、つい先延ばしになっていた。昨年、意を決して書家の石丸繁子さんが開く書道塾の門をたたいた。

自分の筆のクセを知ってもらうため、半切に196文字の般若心境を8時間かけて書いて師匠に見せたり、「この文字のバランスをどう書けばいいのか」などと、家で書いた半紙を示して質問したりする熱心さに、他の生徒らも刺激を受ける。いつも後ろの席に座る大学職員の佃架奈さん(28)は「升崎さんは祖母と同じ世代だが、上達への意欲がすごい。見習わないと」と感心する。

行書を始めて1年足らずで受賞した奨励賞は、塾生の中では最高位の賞。升崎さんは「教室では、若い人たちが仲間に入れてくれた。自分はまだまだなのに、こんな賞をいただき夢のよう」と喜んだ。石丸さんも「ものすごいチャレンジ精神。毎日練習して上達した結果ですね」と太鼓判を押す。

幼い頃に両親を亡くし、戦中戦後の厳しい時代を生き抜いてきた升崎さん。「青春なんてなかった。今は毎日が青春のよう。気力、体力、知力のうち、もう気力しかありませんが、若い人に負けないように頑張りたい」とはにかんだ。

朝日新聞愛媛版
2009年9月20日掲載
了承済み